

陸奥国色麻郡所在の渡来仏

—— 船形山神社御神体をめぐって ——

門 脇 佳代子・渡 邊 泰 伸*

要旨：船形山神社は宮城県北部南端の大和町に位置する。この地域は、古代において色麻柵を中心とした色麻郡の領域に含まれる。船形山神社に御神体として伝わる金銅仏「菩薩立像」は、久野健氏、松山鉄夫氏の紹介によって韓半島由来のものであることが指摘され、多くの識者の検討により百済仏とされてきた。本稿では従来までの美術史的な見方に、考古学的な知見を加味して、本像をこの地にもたらした人々の存在に迫った。古墳の変遷、官衙の成立、生産遺跡の操業などを視座にみると、渡来系の移民の姿が垣間見られる。中でも色麻古墳群より出土する須恵器は湖西窯跡品と考えられ、多数の移民の存在を推定できる。また色麻町土器坂瓦窯跡から出土した雷文縁4葉複弁蓮華文軒丸瓦によって7世紀末～8世紀初頭に紀寺系の軒瓦を使用した官衙と寺院が成立したことがわかる。古代色麻郡は多賀城以前の7世紀後半代には北進・西進の拠点となり、活発な動きのあった地域でもある。よって、従来まで8世紀～9世紀と考えられていた「菩薩立像」の当地への伝来の時期を見直し、渡来系移民による7世紀後半に位置付けたい。

キーワード：百済仏、船形山神社、色麻郡

は じ め に

東北地方に在地の仏像が成立普及するのは平安時代になってのことだが、それ以前に制作され、持ち込まれたと見られる小金銅仏がいくつか確認されている。所在は次の通り。福島県の羽黒山湯上神社「観音菩薩立像」、福聚寺「観音菩薩立像」。宮城県の船形山神社「菩薩立像」、洞源院「菩薩立像」。山形県の円福寺「観音菩薩立像」、大日坊「如来立像」、山神社「如来倚像」、安養寺「観音菩薩立像」。秋田県の正伝寺「観音菩薩立像」、闍信寺「十一面観音菩薩立像」、光禪寺「菩薩坐像」。岩手県の源勝寺「観音菩薩立像」。青森県の聖福寺「観音菩薩立像」である（図1）。これらの小金銅仏は10 cm 余のものから、多くは30 cm 内外の大きさであり、持ち運びの便に優れている。また古い来歴の分からないものがほとんどであり、後世にもたらされた可能性は個別に考えねばならない。しかし、その存在は仏教の伝播を考えるうえで重要な示唆を含んでいる。

東北地方における仏教の伝播について『日本書紀』は、689（持統天皇3）年、正月三日条に陸奥国優嗜曇郡（現在の山形県置賜地方）の麻呂と鉄折の二人が出家を願い出て許されたこと、また同年の七月一日条に陸奥の蝦夷僧自得が金銅薬師仏像・金銅観音菩薩像などを授けられたこ

*東北学院大学非常勤講師

地域	番号	名称	所蔵	所在地	制作時期	図版参照
福島	1	観音菩薩立像	羽黒湯上神社	会津若松市東山町湯本	7～8世紀	F (p. 97), G (p. 317), H (p. 42), J (p. 35), K (図 21)
	2	観音菩薩立像	福聚寺	喜多方市関柴町平林地利前	7～8世紀	F (p. 101), G (p. 322), H (p. 42・49), J (p. 36), K (図 94)
宮城	3	菩薩立像	船形山神社	黒川郡大和町吉田字升沢	6世紀	F (図 1, pp. 145～150), G (p. 392), H (p. 39)
	4	菩薩立像	洞源院	石巻市渡波字仁田山	8世紀 (統一新羅) カ	C (pp. 1～7)
山形	5	観音菩薩立像	円福寺	西置賜郡白鷹町高玉	7世紀後半	G (p. 369), H (p. 47), I (p. 101)
	6	如来立像	大日坊	鶴岡市大綱字入道	7世紀	H (p. 51), K (図 12)
	7	如来倚像	山神社	最上郡真室川町内町	8世紀	G (p. 368), H (p. 45・48), I (p. 102)
	8	観音菩薩立像	安養寺	山形市蔵王半郷	7～8世紀	D (p. 92)
秋田	9	観音菩薩立像	正伝寺	横手市大屋新町字鬼嵐	8世紀	F (p. 103), G (p. 373), H (p. 43・48), J (p. 37), K (図 71)
	10	十一面観音菩薩立像	蘭信寺	秋田市手形字蛇野	8～9世紀	B (pp. 405～409), J (p. 38)
	11	菩薩坐像	光禪寺	由利本荘市松ヶ崎字光禪寺前	8世紀 (統一新羅) カ	E (p. 84)
岩手	12	観音菩薩立像	源勝寺	盛岡市北山	7世紀	F (p. 103), G (p. 394), H (p. 43), I (p. 103), K (図 91)
青森	13	観音菩薩立像	聖福寺	上北郡おいらせ町阿光坊	7世紀	A (p. 34, pp. 88～89), F (p. 98), H (p. 44・49), I (p. 100), J (p. 34)

- A. 青森県環境生活部県民生活文化課県史編さんグループ編 (2008) 『青森県叢書 南部の仏像―上北・三八地方寺社所蔵文化財調査報告書―』 青森県
 B. 秋田市編 (2000) 『秋田市史 15 美術工芸編』 秋田市
 C. 石巻市教育委員会編 (1990) 『石巻市文化財だより』 19 石巻市教育委員会
 D. 相賀徹夫編 (1985) 『みちのく伝統文化 1 古美術編』 小学館
 E. 大矢邦宣編 (1998) 『本荘の神仏像』 本荘市神社仏閣調査報告書 本荘市史編さん室
 F. 久野健 (1982) 『古代小金銅仏』 小学館
 G. 久野健編 (1989) 『日本の仏像 北海道・東北・関東』 仏像集成 1 学生社
 H. 「白い国の詩」編 (1999) 『日本韓国の古代仏教彫刻 金銅仏』 東北電力株式会社
 I. 東北歴史博物館編 (1999) 『祈りのかたち 東北地方の仏像』 東北歴史博物館
 J. 東北歴史博物館編 (2009) 『東北の群像 みちのく祈りの名宝』 東北歴史博物館
 K. 松原三郎・田辺三郎郎 (1979) 『小金銅仏』 東京美術



図 1 東北地方における古代小金銅仏の分布

とを記しており、正史上の記録ではこれが最も早い。

一方、上記の小金銅仏の中で最古と目されるのが船形山神社に御神体として伝わっている「菩薩立像」（以下、船形山神社像）であり、6世紀頃に作られた韓半島からの渡来仏であろうことが早くから指摘されている。ただし毎年5月1日の祭礼日に限って開帳される秘仏であり、御神体として祀られるようになった時期や経緯をはじめ近世以前の由来に関しては不詳である。従来、本像の来歴に関しては、724（神亀元）年の多賀城創建とともに陸奥国の建国整備が行われた8～9世紀にかけて、中央政府が関東地方から大量の移民を入植させたことが背景にあると語られ、そこには渡来系の移民も想定されてきた（久野 1981 大矢 1999）。しかし近年、東北地方への中央文化の伝播が4世紀にまで遡ることが明らかになってきた¹⁾。そこで本稿では、船形山神社周辺の古代遺跡や歴史的環境を通して、渡来系の人々の足跡を探ることで本像がこの地にもたらされた時期を考察し、在地の歴史から仏教移入の問題を取り上げたい。

1. 船形山神社の祭礼と御神体

1) 立地と由来

船形山神社は宮城県黒川郡大和町柊沢 108 に所在する。大和町の中心街から、西へ 20 km ほど 147 号線（柊沢吉岡線）を旗坂野営場へ進むと、宮城県水産技術総合センター内水面水産試験場があり、その北側丘陵上に位置する（図 2）。古代におけるこの地域は、色麻郡と考えられ、色麻柵を中心とした軍事的拠点の領域内として考えられる。

林道脇にある参道入口には「船形山神社入口」の案内板が立っている。その道を進み右手に曲がると赤い鳥居が建ち、小さな木橋を渡ると参道登り口に恵比寿・大黒天を祀る護摩堂があり、それを通り抜けて急な斜面を一気に登る。斜面を登るには鎖やロープに頼らなければならない。

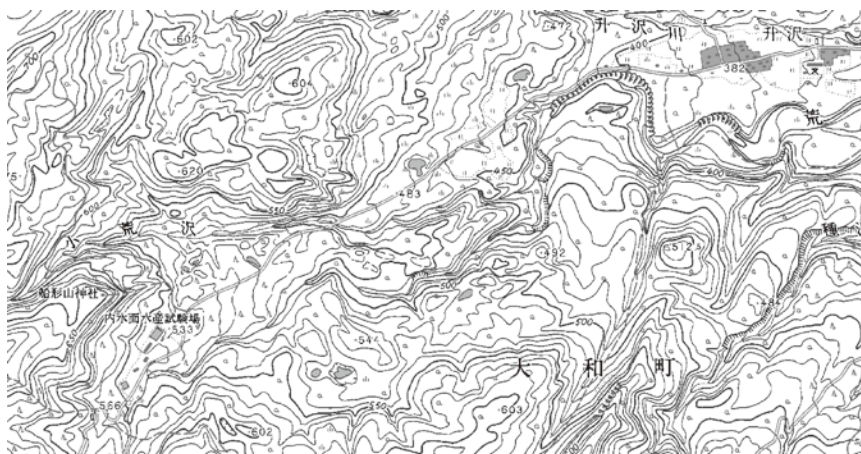


図 2 船形山神社の位置図

その道を登りきると開けた山頂に境内がある。登り口の正面に流造の本殿（旧薬師堂）、左手奥に小ぶりの拝殿がある。

西に聳える船形山を遥拝する神社であり、保食神を祀る。1719（享保4）年の『奥羽観蹟聞老志』には、第十八代反正天皇の時に船形山に奉祀されたと伝えられるが、当社の創建時期は不明である。1899（明治32）年より、船形山神社と称している（黒川郡教育会1972）。

2) 祭礼

船形山神社では5月1日に例祭が行われる（東北民俗の会2003）。御開帳とも呼ばれ、長さ2mほどの青竹に紙垂を挟んだ「梵天」を社殿に奉納することから始まる。神職が山中の秘所に安置されているとされる御神体、すなわち金銅製の「菩薩立像」を迎えて行われる祭である（図3）。祝詞奏上が終わり、拝殿に納められた御神体が開帳され、その湿り具合で今年の天候を占うといわれている。開帳が終わると、「梵天」が参詣者の中に投げ入れられ、それを奪い合う「梵天ばやい」が行われる。竹と紙垂を里に持ち帰り、田の水口に祭り祈念すれば、その年豊作になるといわれる。この祭は宮城県指定無形民俗文化財となっている。

御神体を山中より迎え、その発現によって豊凶作を占する田の神迎えの神事である。山の神が春に山を降りて田の神となり豊作を見守り、収穫が終わると再び山へ帰り山の神になるという伝承がそのまま祭の形になっている。

3) 御神体「金銅菩薩立像」

御神体として祀られる船形山神社像（図4）について、以下に造形的特徴を述べる。2014（平



図3 船形山神社所蔵「金銅菩薩立像」



図4 船形山神社像描き起こし図
（正面・側面）

成 26) 年および 2015 (平成 27) 年の祭礼に参加し、筆者が視認した現状をもとにし、数値に関しては先行研究を参考にした (松山 1979)。

像高 15.1 cm, 台座を含めた総高は 19.2 cm。裳や天衣をまとい、宝冠・頸飾・瓔珞を身につけた菩薩形。左右の腕はともに屈臂し、右手は掌を正面にして第 4・5 指を曲げた与願印をとる。左手は掌を外にして第 4・5 を曲げた施無畏印だが、伸ばした第 2・3 指の指先は欠損している。

体軀は扁平で衣の下にはほとんど肉体を感じさせない。側面から見ると頭部がやや前傾し、顎を引き、下腹をゆるい弓状に突き出している。両眼は細く、顎は小さい。やや面長だが、目鼻立ちが下方に寄っているため表情にあどけなさを与え、柔和な笑みを浮かべている。

頭部の三つの花飾りをつけた宝冠は三花冠と呼び、中でも花飾りの中心部分から大きな花芯が前方に突き出しているものは珍しい。3つの花飾りは、それぞれ 8 葉の花弁を刻む。また冠帯からは幅広い飾り紐が両肩に垂れている。左右の肩の上に大きめの丸い飾りを表わす。首元には中央が下向きに尖った逆火頭形の頸飾をつけている。胸元を斜めに横切る線は下着 (僧祇支) を表わしたものである。着衣では、足首にかかる衣文の重なりから二重に裳 (あるいは裳と僧祇支) をまとうことがわかる。体側から左右対称に張り出した魚鱗状の天衣は正面観を意識したもので、飛鳥時代の止利様式の仏像にも共通する。装身具や下半身を覆う衣文もほぼ左右対称である。両肩から垂れた天衣は腹前で交差し、その上に X 字形の大きな瓔珞を懸けている。左最下方の天衣の先端は一部欠損している。

背面には頭部中央に小型の柄が一つと、腰の右寄りに大型の柄が一つある。腰部の柄はこの像を光背に設置するための機能であり、もとは三尊形式で大きな船形光背に付いていた脇侍菩薩の内、左側に立つ一体であったことを示している。像の立つ台座は砲弾型の蓮肉を表わし、非常に珍しい。蓮肉の下端に見られる柄の状態から当初は蓮茎と接合していた可能性も指摘されている (松山 1979)。蓮肉上に立つ足元には安定感がある。

本像は蠟型鑄造による一鑄で、鍍金については現状目視では確認できない。しかし久野健氏によれば、右手の指の間、両足の縁の部分、胸の一部に鍍金が残っていたという (久野 1981)。鍍金こそほとんど残っていないものの銅表面の荒れは少なく、全体的に良好な保存状態である。丁寧に保持されてきたことが観察できる。

2. 先行研究

1) 高橋氏・久野氏・松山氏・大西氏の見解

船形山神社像を取り上げた嚆矢としては、高橋富雄氏の見解がある (高橋 1975)。高橋氏は、船形山神社に御神体として飛鳥様式の古様を伝える金銅製観音像が伝わっており、年に一度の祭礼にのみ拝礼が許されることを述べている。しかし高橋氏は、本像が平素秘密の場所に隠されている神聖な存在で、こうした原始的信仰形態を伝える像を不用意な関心で暴くことが招く不測の

事態を危惧し、あえて詳述を避けたという（高橋 1985）。

続いて、本像の造形的側面に注目し本格的な調査に乗り出したのが久野健氏である。1971（昭和 46）年に吉田潤之介氏²⁾ 持参の写真によって船形山神社像の存在を知った久野氏は、その後 1978（昭和 53）年に許可を得て、同年 5 月 1 日の祭礼日に松山鉄夫氏による本像の撮影、そして翌年の 5 月 1 日に久野・松山両氏による現地での調査が行われた（松山 1979）。調査の結果を踏まえた両氏の見解は以下の通り。

久野氏は、船形山神社像の砲弾型をした蓮肉の形式が日本の 7～8 世紀の小金銅仏に認められず、三花冠の形式が中国の北魏や西魏の遺品、韓半島の扶余から出土している小金銅仏中に確認できることから渡来仏とした（久野 1979）。さらに様式的には、北魏永安三（530）年銘「金銅菩薩立像」に加え、南朝梁の在銘彫刻中に 6 世紀前半の類例を探し、船形山神社像の制作時期は中国から韓半島へと新様式が伝播する時間差から 6 世紀中葉に近い頃と推測した（久野 1981 久野 1982）。

松山氏も北魏から東魏・西魏の小金銅仏の中に類例を挙げて、渡来仏であるとの見方を示している。しかし様式変遷の流れとしては、6 世紀前半の北魏末から東西魏にかけて行われた一様式が、高句麗を経由して百済にもたらされた過程において、船形山神社像を 6 世紀末頃に百済で造られたものとした（松山 1979）。

また大西修也氏は、船形山神社像に止利派の作品全体に共通する様式の原点を見出し、船形山神社像を通して飛鳥時代の止利式仏像形成に梁代彫刻の流れを読み取っている（大西 2002）。

2) 船形山神社像の制作時期 ―類似作例との比較から―

次に、前述の久野氏、松山氏の見解を元に、船形山神社像と共通点をもつ韓半島および中国の類例から船形山神社像の制作時期について整理検討を行う。（巻末資料「韓半島・中国の関連小金銅仏属性一覧」参照）

船形山神社像に最も近いと見られる小金銅仏は、韓国の扶余軍守里廃寺跡から出土した「金銅菩薩立像」（韓国国立中央博物館所蔵）と、同じく扶余窺岩面新里出土の「金銅菩薩立像」（韓国国立扶余博物館所蔵）である。出土地から、両像ともに百済仏の基準作とされる。船形山神社像との形式上の共通点として、宝冠や頸飾、両肩の円形装飾、腹前で交差する天衣や魚鱗状の天衣などが挙げられ、顔や手足が大きく、寸胴で短めの体躯、柔和な古式の笑みを浮かべる点も共通する。窺岩面新里出土像は背面腰部に大きな柄を持っており（黄 1978）、一光三尊像の脇侍であったと考えられる。宝冠部分を船形山神社像と比較すると、3 つの花飾を明確に表わす船形山神社像に比べ、軍守里廃寺跡出土像は花芯の突起は表現しつつも花卉は省略しており、窺岩面新里出土像では単純な 3 つの円形に簡略化されている。

中国での近似例としては、北魏末の永安三（530）年銘「金銅菩薩立像」（個人所蔵）に、X 字状や魚鱗状の天衣、腹前で交差する瓔珞、三花冠における花芯の突起や花卉の表現が見られる。

船形山神社像がこうした先例に倣って造られたとして、装身具を省略せず、細部に見るある種の鋭さは、軍守里廃寺跡出土像や窺岩面新里出土像に比べ、船形山神社像が中国の源流により近いことを感じさせる。

しかし一方で、生氣ある明るい表情などは、すでに指摘のあるように南朝の梁で作られた仏像との共通点と見ることができる（久野 1981 大西 2002）。梁中大同三（548）年銘の「観音及諸尊像」（中国四川省博物館所蔵）などの石造仏には、冠帯の幅広の飾紐、頸飾、X 字形の瓔珞といった共通点もある。扶余遷都後の百済は梁と密接な関係を保ち、その影響を受けて仏教が隆盛したことからも、造形感覚における近似性を理解することができる。

装飾や着衣の形式は、巻末資料「韓半島・中国の関連小金銅仏属性一覧」にある通り、北魏から東魏・西魏、梁に見られ、北周や陳にも作例を確認できる。しかし 6 世紀後半には、形式的には同じでも穏やかな丸みや動きをもつようになり、異なる造形感覚が認められる。また韓半島の在銘三尊像の類例では、小像の脇侍であることは考慮すべきだが、6 世紀半ばにして装飾等の簡略化が目立つ。

以上を踏まえ、船形山神社像の制作年代については、軍守里廃寺跡出土像と窺岩面新里出土像より古く、北魏あるいは東魏・西魏の様式、および梁の影響を受けて成立した 6 世紀中葉の百済仏であると考えられる。船形山神社像の造形様式は、中国、韓半島と日本を含めた広域の東アジアにおける仏教東遷の大きな流れの一つとして捉えることができる。

3. 船形山神社をめぐる歴史的環境 ―古代色麻郡の様相―

宮城県北部の地形は、西部は奥羽山系の丘陵、東部は北上山系の丘陵地帯であり、両丘陵地の中央部が平野部となっている。中央の平野部は、東部が北上川流域で南北に広がる沖積地を形成している。この沖積地は北上川低地帯と呼ばれる谷地部分が多く、その本格的な開発は近世以降である。西部は奥羽山系から東へのびる丘陵間に形成された東西に広がる沖積地で、三地域に分かれる。すなわち北から迫川流域、鳴瀬川・江合川流域、吉田川流域である。西部の各沖積地は古くから開発が進み、その周辺に各時代を通じて多数の遺跡が存在している。鳴瀬川・江合川流域は上流の大崎地方と下流の石巻地方に分けられる。大崎地方は大型古墳の分布から 4 つの小地域が想定され、各地で異なる様相が認められる。すなわち東部、中央部、南西部、西部である。ここでは古代色麻郡域に相当する南西部（色麻町北東部と加美町南東部）に分布する古墳、官衙・寺院跡、瓦窯跡等の遺跡の様相を紹介しながら、移民の活動を検討したい。

1) 古墳

宮城県北部の古墳時代は、東北南部と同時期の 4 世紀に始まったと考えられる。前期前葉の土器群には関東地方や北陸地方の系譜を持つ土器がある。沿岸部の海からのルート、或いは内陸部

ルートが想定される。

古代色麻郡は宮城県北部の最南端に位置する。この地域における古墳の分布は、江合川・鳴瀬川流域の平野部（大崎平野）の南西端に位置している。この地域には標高30～90mの扇状地性の洪積台地が広がり、これらの台地を開削して花川・保野川などの中小河川が北東に流下し鳴瀬川に合流している。この地域には次の古墳がある。前期の前方後円墳で全長63mの色麻町熊野堂神社古墳。中期としては色麻町御山古墳、念南寺古墳が丘陵上にあり、御山古墳だけが花川の下流に位置する。後期末（7世紀末～8世紀初）になると、花川流域の中・下流域南北兩岸の東西2km・南北1km、標高35～45mの範囲に色麻古墳群が造営される。確認できる古墳の大部分は水田中に残存している。発見された遺構は横穴式石室と竪穴式小石室があり、平面形の側面が膨らむ胴張が見られる。群馬県西南部、埼玉県北部の古墳にも共通する特徴である。また土師器と須恵器が出土し、関東系土師器ならびに湖西窯と考えられる須恵器が出土している。このことは移民の存在を示すものである（佐々木他1985 渡辺他1999）。

その他にも後期・終末期群集墳があり、岩出山町川北横穴墓群では200基を超える横穴の存在が推定されている（辻1984）。近接する他地域にも多数の横穴墓群が造営されている。

2) 官衙・寺院跡、瓦窯跡

本地域には、群集墳と平行する時期の7世紀後半～8世紀初頭に官衙・寺院、瓦窯が造営されている。色麻町一の関遺跡、美里町城生遺跡と菜切谷廃寺、大崎市名生館官衙遺跡と伏見廃寺など比較的多くの遺跡が調査されている。

一の関遺跡は色麻古墳の南東約1kmに位置し、建物基壇跡・掘立柱建物跡・土塁状遺構などが発見され、出土遺物から8世紀を中心とした寺院跡であると推定されている（宮城県教育委員会1977）。

城生遺跡は一の関遺跡の北方約6kmに位置し、調査で築地・溝による外郭施設と、その内部に掘込地蔵倉庫跡・掘立柱建物跡・竪穴式住居跡が発見され、北辺外郭線中央に八脚門も確認されている。出土遺物より8世紀前半から平安時代にかけてのものと考えられており、遺構の状況から官衙施設としての性格をもつとされている（中島1984）。なお、この北東約1kmには、付属寺院とされる菜切谷廃寺跡がある（伊東1956）。

城生遺跡のさらに6km北北東には名生館官衙遺跡が位置している（宮城県多賀城跡調査研究所1981）。現在までの調査で、7世紀末～9世紀にかけての掘立柱建物群・竪穴住居跡などが発見されている。特に7世紀末～8世紀初頭には瓦葺き、四面廂付掘立柱が造営されており、整った官衙施設である。なおこの南約0.8kmには付属寺院とされる伏見廃寺跡がある（佐々木1970）。

瓦窯跡としては、色麻町土器坂瓦窯跡、同町日の出山瓦窯跡群、同町高根窯跡群がある。

土器坂瓦窯跡は、色麻町一の関土器坂に所在する。愛宕山公園と国道457号線を挟んだ西側

1 km の北斜面に位置する。2 基の瓦窯が発見され、1 基が調査された。1 号瓦窯跡は全長 7.65 m、焼成部幅 1.03 m、燃焼部・焚口幅 0.8 m ほどの半地下式無階無段登窯である。出土遺物は雷文縁 4 葉複弁蓮華文軒丸瓦である（図 5）。この瓦は会津若松市村北瓦窯跡と同様式の軒瓦である（小滝 1971）（図 6）。時期は 7 世末～8 世紀初頭と考えられる。供給先は一の関遺跡（図 7）、菜切谷廃寺である（図 8）（渡邊 2005）。

土器坂瓦窯跡出土の雷文縁 4 葉複弁蓮華文軒丸瓦は、紀寺式軒丸瓦に分類される。紀寺式とは軒丸瓦の内区が川原寺式や本葉師寺式などに見られる複弁蓮華文で、外区の雷文が特徴である（図 9）。なお、紀寺は奈良県明日香村小山にある古代寺院で、近年は小山廃寺と呼ばれている。紀寺跡と考えられたことから、この寺の創建に使われた軒丸瓦が紀寺式と呼称されてきた。その瓦の



図 5 色麻町土器坂瓦窯跡出土
雷文縁 4 葉複弁蓮華文軒丸瓦

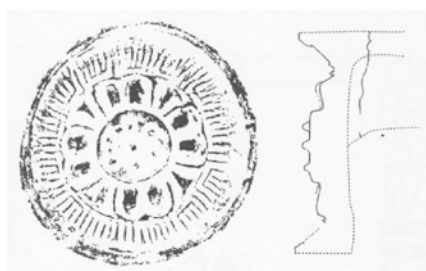


図 6 会津若松市村北瓦窯跡出土
雷文縁 4 葉複弁蓮華文軒丸瓦

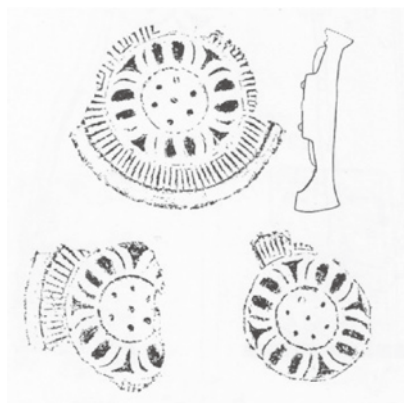


図 7 色麻町一の関遺跡出土
雷文縁 4 葉複弁蓮華文軒丸瓦



図 8 美里町菜切谷廃寺出土
雷文縁 4 葉複弁蓮華文軒丸瓦



図9 明日香村紀寺（小山廃寺）出土 雷文縁8葉複弁蓮華文軒丸瓦

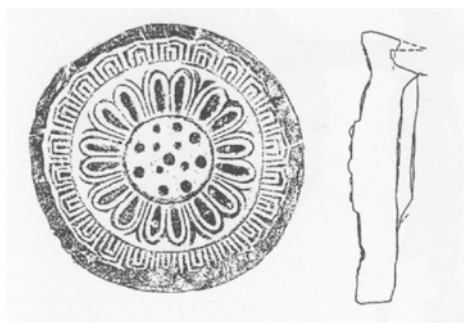


図10 枚方市九頭神廃寺出土 雷文縁8葉複弁蓮華文軒丸瓦



図11 明日香村大宅廃寺出土 雷文縁8葉複弁蓮華文軒丸瓦

祖型は河内九頭神廃寺にあり、さらに同廃寺からは高句麗や新羅と関連する瓦が出土しており、紀寺式軒丸瓦の成立には韓半島の瓦の影響が考えられる（図10）（濱田・梅原1934）。この形式の瓦は、重弧文軒平瓦が組み合うことから670～680年前後と考えられている（亀田2006）。紀寺（小山廃寺）は藤原氏の氏寺であった大宅廃寺とされ（図11）、藤原不比等と持統天皇が造営したことから、雷文縁4葉複弁蓮華文軒丸瓦が山背宇治郡、紀伊郡、葛野郡の氏寺は元より、多くの地方寺院に採用されたと考えられている（小笠原2005 奈良文化財研究所2009）。

また日の出山瓦窯跡群は、8世紀初頭の高賀城創建期の重弁蓮華文軒瓦を焼成した窯跡である（岡田他1970）。瓦の変遷から見ると、色麻町土器坂瓦窯跡から出土した雷文縁4葉複弁蓮華文軒丸瓦は、高賀城創建期の重弁蓮華文軒瓦より古い。高賀城以北の地において紀寺系様式をもつ最先端の瓦生産が始まったのは、渡来系の人々の存在なくしては考えにくい。

一の関、城生、名生館などの官衙関連遺跡は、現在の陸羽街道沿いに約6km間隔で位置している。名主館官衙遺跡は玉造郡域内に属し、玉造柵跡の有力な擬定地とされ、一の関遺跡は色麻柵跡に関連する施設と考えられ、いずれも郡域の中心施設であったと推定される（宮城県教育委員会1977）。色麻柵は7世紀後半～8世紀初頭に出羽国との交通網をつくるための拠点であり、

色麻郡はそれを支えた地域であった。

お わ り に

色麻郡内の古墳の変遷は丘陵上の4世紀の前期古墳にはじまり、5～6世紀と継承し、7世紀第4四半期に至って平坦地に移動し小型の群集墳が成立する。この現象は支配者の転換ないしは変質を考えることができる。特に色麻古墳群より出土する須恵器は湖西窯跡品と考えられ、多数の移民の存在を推定できる。また官衙の造営は7世紀第4四半期にはじまり、7世紀末～8世紀初頭に雷文縁4葉複弁蓮華文軒丸瓦のような紀寺系の軒瓦を使用した官衙と寺院が成立した。いずれも8世紀初頭の多賀城成立以前であるのは注目すべきことである。官衙の周辺に群集墳が分布し、色麻古墳の構造・出土遺物からそれらの被葬者の性格は移民であり、渡来系の要素を読み取ることができる。

ここで改めて7世紀後半の陸奥国の情勢を見れば、661（斉明7）年～663（天智2）年頃、白村江の戦いに代表される韓半島での戦争があり、『続日本紀』707（慶雲4）年五月癸亥条に陸奥国信太郡の生王百足（信夫郡の生玉百足または壬生五百足の誤りか）が百済救援の韓半島での戦いで捕虜となり40年後に帰国したと伝えている。つまり7世紀後半には陸奥国の中に徴兵されて韓半島に赴いた人がおり、当時すでに評が成立していたことを示している（渡辺他1999）。また、福島市腰浜廃寺出土の素弁8葉蓮華文軒丸瓦が（図12）広島県三次市寺町廃寺出土の瓦に近似しているという指摘がある（図13）（伊東他1965 伊東1977）。三次市寺町廃寺は『日本霊異記』に見られる備後国三谷寺とされ、備後三谷郡の大領が百済救援に出陣する際、無事帰還の暁には寺院を建立することを発願し、帰国後百済から伴った弘済禪師に建立させたと伝えている。さら



図12 福島市腰浜廃寺出土
素弁8葉蓮華文軒丸瓦1類



図13 広島市寺町廃寺出土 素弁8葉
蓮華文軒丸瓦・単弧文軒平瓦



図14 熊本市鞠智城出土
素弁8葉蓮華文軒丸瓦



図15 韓国扶余市軍守里廃寺出土
素弁8葉蓮華文軒丸瓦

に同形式の瓦が熊本県山鹿市鞠智城（図14）（熊本県教育委員会編1983）、韓国扶余軍守里廃寺跡からも出土している（図15）（国立扶余博物館1994）。

船形山神社像が現在のかたちで祀られるようになった時期は明らかでないが、様式的な検討から6世紀の百濟仏であることは疑いなく、古代においていち早く先進文化が移入された地域に伝わることは注目される。7世紀後半の色麻郡の状況は渡来系移民の活動を示唆しており、船形山神社像は、それらの人々によってもたらされた可能性が極めて高い。従来まで8世紀～9世紀と考えられていた船形山神社像の伝来時期を、7世紀後半に位置付けることが可能となった。

今回の小論は従来までの方法とは異なる視座から船形山神社像を再検討してみた。文献および文字史料が乏しく由来不詳の船形山神社像であるが、各地に点在している同様な古代小金銅仏の検討を今後も続けることで伝来時期を追及し、仏教の地方への伝播の在り方を考えていきたい。

執筆分担

「3. 船形山神社をめぐる歴史的環境 ―古代色麻郡の様相―」は渡邊、それ以外は門脇、「はじめに」と「おわりに」は共同執筆である。

注

- 1) 2015年9月21～22日に栗原市文化会館で開催された東北学院大学アジア流域文化研究所公開シンポジウム「古代倭国北縁の軋轢と交流―栗原市入の沢遺跡で何が起きたか」で、4世紀代と考えられる入の沢遺跡から銅鏡・玉・刀等の出土したことが報告された。
- 2) 吉田潤之介氏は船形山に対する信仰や民俗の解明をライフワークとして、長年にわたる現地調査を実施した。1918生～2000没。（鈴木岩弓編2008『船形山の民俗 吉田潤之介探訪資料』東北文化資料叢書3 民俗資料 東北大学大学院文学研究科東北文化研究室）

引用文献

- 伊東信雄（1956）『菜切谷廃寺跡』宮城県文化財調査報告書 2 宮城県教育委員会
- 伊東信雄・伊藤玄三・内藤政恒編（1965）『腰浜廃寺』福島市資料叢書集 福島市史編纂準備委員会
- 伊東信雄（1977）「福島県腰浜出土の再吟味—広島県寺町廃寺出土土瓦との比較について—」『慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集』松崎寿和先生退官記念事業会 pp. 375～388
- 大西修也（2002）『日韓古代彫刻史論』中国書店 pp. 381～402
- 大矢邦宣（1999）「東北地北部の仏像」展覧会図録『祈りのかたち 東北地方の仏像』東北歴史博物館 pp. 126～135
- 小笠原好彦（2005）『日本古代寺院造営氏族の研究』東京堂 pp. 165～176
- 岡田茂弘・工藤雅樹・桑原滋郎（1970）『日の出山窯跡郡』宮城県文化財調査報告書 22 宮城県多賀城跡調査研究所
- 亀田修一（2006）『日韓古瓦の研究』吉川弘文館 p. 248
- 久野健（1979）『古代朝鮮仏と飛鳥仏』東出版 本文 pp. 13～16
- 久野健（1981）『古代仏の旅』日本経済新聞社 pp. 21～45
- 久野健（1982）『古代小金銅仏』小学館 pp. 145～150
- 熊本県教育委員会編（1983）『鞠智城跡—第 1～7 次調査報告—』熊本県教育委員会
- 黒川郡教育会編（1972）『黒川郡誌』名著出版 pp. 67～68
- 国立扶余博物館編（1994）『国立扶余博物館』国立扶余博物館
- 小滝利意（1971）『会津若松市一箕町居合団地埋蔵文化財発掘調査報告書』会津若松市教育委員会
- 佐々木和博・古川一明・大槻仁一（1985）『色麻町 香ノ木遺跡 色麻古墳群』宮城県文化財調査報告書 103 宮城県教育委員会 pp. 48～149
- 佐々木茂樺（1970）「宮城県古川市伏見廃寺跡」『考古学雑誌』56 の 3 pp. 23～60
- 高橋富雄（1975）「黒川の古代仏教文化」宮城県大和町『大和町史』pp. 186～189
- 高橋富雄（1985）『みちのく古寺巡礼』日本経済新聞社 pp. 37～41
- 辻秀人（1984）「宮城県の横穴と須恵器」渡辺信夫編『宮城の研究 1 考古学編』清文堂 pp. 356～424
- 東北民俗の会編（2003）『升沢にくらす 集団移転に伴う民俗調査報告書』宮城県大和町教育委員会 pp. 167～174
- 中島直（1984）『国指定史跡城生柵跡保存管理計画書』中新田町文化財調査報告 9 中新田町教育委員会
- 奈良文化財研究所編（2009）『古代瓦研究 IV —法隆寺式軒瓦の成立と展開—雷文縁・幅線文縁・重圈文縁複弁蓮華文軒丸瓦の展開』古代瓦研究会シンポジウム記録 奈良文化財研究所 pp. 180～268
- 濱田耕作・梅原末治（1934）『新羅古瓦の研究』刀江書院 図版第 22・35
- 黄寿永（1978）『韓国仏像の研究』同朋舎「三、扶余窺岩出土百済仏菩薩像」pp. 75～87
- 松山鉄夫（1979）「船形山神社の金銅菩薩立像について」『仏教芸術』pp. 46～53
- 宮城県教育委員会編（1977）「一関遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報（昭和 51 年度分）』宮城県文化財調査報告書 48 宮城県教育委員会 pp. 68～101
- 宮城県多賀城跡調査研究所編（1981）『名館遺跡 1—玉造の柵推定地—』多賀城関連遺跡調査報告書 6 宮城県多賀城跡調査研究所
- 渡邊泰伸（2005）「宮城県加美郡色麻町土器坂瓦窯跡の調査—雷文縁 4 葉複弁蓮華文軒丸瓦を出土する飾磨柵付属瓦窯跡の調査—」『仙台育英学園高等学校研究紀要』20 pp. 78～181
- 渡辺信夫・今泉隆雄・大石直正・難波信雄（1999）『宮城県の歴史』県史 4 山川出版社「2 章 律令国家と蝦夷」pp. 31～73

図版目録（出典）

- 図1 東北地方における古代小金銅仏の分布
図2 船形山神社の位置図（国土地理院「数値地図25000」2002年）
図3 船形山神社所蔵「金銅菩薩立像」2015年 門脇撮影
図4 船形山神社像描き起こし図（正面・側面）2015年 門脇作図
図5 色麻町土器坂瓦窯跡出土雷文縁4葉複弁蓮華文軒丸瓦（渡邊泰伸 2005 pp.156～157）
図6 会津若松市村北瓦窯跡出土雷文縁4葉複弁蓮華文軒丸瓦（奈良文化財研究所編 2009 p.92）
図7 色麻町一の関遺跡出土雷文縁4葉複弁蓮華文軒丸瓦（奈良文化財研究所編 2009 p.95）
図8 美里町菜切谷廃寺出土雷文縁4葉複弁蓮華文軒丸瓦（伊東信雄 1956 p.32）
図9 明日香村紀寺（小山廃寺）出土雷文縁8葉複弁蓮華文軒丸瓦（小笠原好彦 2005 p.167）
図10 枚方市九頭神廃寺出土雷文縁8葉複弁蓮華文軒丸瓦（小笠原好彦 2005 p.167）
図11 明日香村大宅廃寺出土雷文縁8葉複弁蓮華文軒丸瓦（小笠原好彦 2005 p.167）
図12 福島市腰浜廃寺出土素弁8葉蓮華文軒丸瓦1類（伊東信雄 1977 p.380）
図13 広島市寺町廃寺出土素弁8葉蓮華文軒丸瓦・単弧文軒平瓦（伊東信雄 1977 p.382）
図14 熊本市鞠智城出土素弁8葉蓮華文軒丸瓦（小冊子「ここまでわかった鞠智城」第5号 歴史公園鞠智城・温故創生館 p.4）
図15 韓国扶余市軍守里廃寺出土素弁8葉蓮華文軒丸瓦（国立扶余博物館編 1994 p.79）

